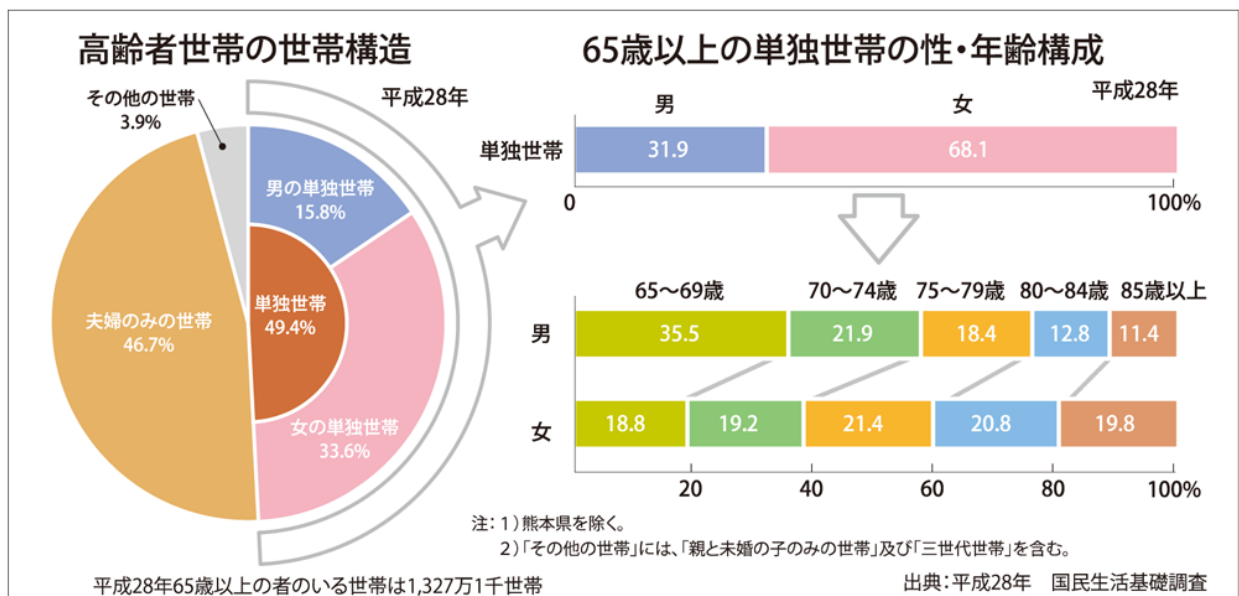


# そよ風

## 「無縁社会」の現場から

老後は、どこで誰を頼りに暮らしますか？老後の不安は募り続けている。取材で孤独死が起きると、現場に駆けつけ、その経緯を明らかにするため、その人の生前の人生をたどった。ごく当たり前の人生を送ってきた人たちが、ささいな理由から社会とのつながりを失い、孤独死に至っていたということだった。65歳以上の高齢者の人口が3千万人を超える中、ひとり暮らしの高齢者が6百万人を超え、増え続けている。高齢者の「5人に1人」がひとり暮らしということになる。

さらに、残りは二人暮らしだ。夫婦のみがもっとも多く、兄弟姉妹、親子の二人暮らしも増えている。もちろん、「ひとり暮らし」は元気なうちはいいが、病気で医療費の負担が増えたり、介護が必要になったりすると経済的に余裕を失う。さらに症状が重くなれば、ひとりで暮らすことも難しくなっていく。その時、頼る相手がいなければ、孤独死のリスクと隣り合わせの暮らしをしなければならなくなる。



なぜ、人生の晩年になって無縁になり、孤独死を迎えてしまうのか。きっかけは配偶者との死別、退職など、日常のごく当たり前の出来事がきっかけとなって社会との「つながり（縁）」をなくしてしまうことだ。さらに、高齢者が孤立する背景にあるのが「老後破産」の現実だ。ひとり暮らしの高齢者は、自分の年金収入で生計を立てている。元気なうちは節約して、やり繰り上手だった人も、病気や介護の費用負担が必要になると途端に行き詰まり、やがて「老後破産」に陥ってしまうのだ。

みずほ情報総研の分析したところ、ひとり暮らしの高齢者およそ6百万人のうち、年金収入が月額10万円以下の人が半数、およそ3百万人に上ることが分かった。つまり、ひとり暮らしの高齢者の半数は、年金収入が生活保護費の支給水準（月額13万円前後 ※自治体によって差がある）を下回っていることが分かったのだ。さらに、こうした人たちが老後破産の状態に陥ると、生活保護に頼らざるを得なくなる。そのため、65歳以上の生活保護受給者は増え続け、百万人に達しようとしているのだ。

## あとがき

周知のとおり、現代は少子高齢化が大きな問題となっており、今後さらに加速する勢いです。年金や医療費の問題は、次世代の人たちにとっても少なからず負担が増してくることも事実であり、人口減少による「生産力の低下」は日本国そのものの基盤を揺るがす可能性も十分に考えられます。

高齢者問題は人権問題の一つであり、介護施設における人権侵害などのニュースも取り上げられています。生きていく限り、誰でもいずれは高齢者となります。高齢者の人権擁護の視点からも「高齢者に優しい国づくり」を実践していくことが必要不可欠だと思います。今後、高齢者の人口が右肩上がりに増えるなか、諸々の問題にどう対処し、向き合っていくかが国や国民全体の課題であると考えます。